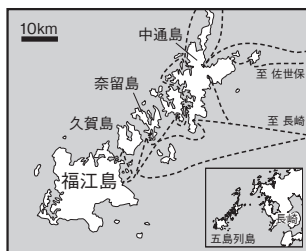


しま山と世界遺産

— 勉強熱心な中高年有志が観光ガイド

ライター 竹内 章



福江島：長崎港の西海上約100kmにある五島列島の主島。面積326km²、周囲320.3km、人口34,215人(平成31年1月末現在)。対馬暖流の影響で気候は温暖で、海洋資源に恵まれている。島内の鬼岳と七ツ岳はしま山100選に選定。椿の島としても知られている。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が二〇一八年、世界文化遺産に登録されたことも追い風となり、構成資産がある長崎県・五島列島の五島市では今年度、島への観光客数が二〇〇四年の市町村合併以降、過去最高を更新する勢いをみせている。

パンフレットやガイドブックを頼りにした島旅も楽しいが、現地で生活しているガイドの「地元目線」をベースとした島の歴史や文化の説明に耳を傾けるのも、また楽しい。

五島市には、観光ガイドを手掛ける団体がいくつかあるが、民間が主導する形でスタートし、今や同市になくてもならない存在にまで成長したのがNPO法人アクロス五島(山口澄子理事長)だ。

今回は、少数精鋭ながら年間一〇〇〇人以上に対応する実力を持ち、今も成長を続けるアクロス五島の現状を取り

組みを紹介したい。

「勉強会」参加メンバーが集い発足

観光ガイドをはじめとする地域活性化事業を手掛けるアクロス五島は発足以来、変化と成長を続けながら地域に根を張り、着実に活動領域を広げている。

組織の歴史をひも解くと、発足のきっかけは五島、杵岐、対馬の各市と新上五島町の官民でつくる「ながさきしま自慢観光人材育成協議会」が、二〇〇七年度から三カ年にわたり実施した「しま自慢観光カレッジ」にさかのぼる。

観光事業による雇用創出を目的に、国の補助事業として行なわれた「勉強会」の一種で、観光ガイドや商品開発など五コース別に講義などが開かれた。

五島市からも意欲あふれる多くの住民が参加し、卒業生



アクロス五島の山口澄子理事長。

のうち中高年世代を中心とする有志一二人が「勉強したことを実践しよう」と立ち上がり、アクロスの前身である任意団体「観光集団アクロス五島」を二〇〇七年に設立した。観光ガイドの経験者がいたわけではなく、特別なノウハウもなかったが「島の活性化に役立ちたい」という強い思いがあったという。

発足当初は、市観光協会からの依頼に基づき、五島市を訪れる修学旅行生を対象とした体験型観光メニューのインストラクター事業を展開。ビーチバレーやビーチフラッグ体験、ウォークラリーなどを手掛けた。

一定の手ごたえがあったことから、組織基盤を強化して活動の輪を広げようと、二年後の二〇〇九年にNPO法人化。これを機に団体を「アクロス五島」に改称した。

ところがNPO法人化と時を同じくして、島内で民泊事業が徐々に広がり、その影響で体験メニューが民泊事業者に移ってしまい、仕事が減る事態に陥ってしまった。

新たな活動の柱が必要となり、次なる一手として活路を見出したのが島の山でのトレッキングガイド事業だった。

「山のガイドといえばアクロス」に

きっかけは、メンバーの中に山の測量士がいたこと。当時は現在のように山のルートが整備されておらず、ある程度ルートはあったが標識も整備されていなかったため、経験のない人にとっては山登りが難しいのが実情だった。

この試みは見事に当たった。山を専門とする旅行会社から「島の山のガイドをしてほしい」という依頼が舞い込むようになった。仕事も徐々に増えていき、いつしか「五島



福江港に到着した客を出迎えるアクロス五島のメンバー。

で山のガイドといえはアクロスしかない」とまで言われるようになった。

トレッキングガイドを足掛かりに、その後はさらに活動を広げ、赤島や黄島といった二次離島の鳥ヶ所巡礼所案内なども手掛けるようになった。

現在の主な活動分野は山のガイドも含

めた「観光型体験プログラム」のほかに、「観光ガイド」「ごみ拾いなどのボランティア活動」「五島の知識を深める活動」の四本柱。メンバーも発足時から入れ替わりを経て、今では三五人が名を連ねている。「もともと体験型に特化してスタートしましたが、さまざまな依頼がくるようになり、今は『何でも屋状態』です」（山口理事長）と、活動の幅は広がる一方だ。

ただ現在は、当初は手掛けていなかった観光ガイドが活動の中心で、年間の対応人数は一〇〇〇人以上になるといふ。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録を機に始まった世界遺産の集落・教会を巡るツアー「五島列島キリシタン物語」をはじめ、星空観察会のガイドなども行なっている。



「島のおもてなし」の一環として取り組むごみ拾い活動。

独力で運営、人が人を育てる組織体質

アクロスの特色として、組織の運営に対して行政の補助金を受けていないことがあげられる。

前身である「観光集団アクロス五島」発足時から、何の補助金ももらわず自分たちの力だけで運営する方針を掲げ、その精神が今に至るまで脈々と受け継がれてきた。

収益の柱はガイド事業で、ガイド料は一時間二〇〇〇円。そのうち四分の一がアクロスの運営費に回り、残りがガイドへの報酬となっている。

ただ、それでも運営費は潤沢ではなく、島外への研修などは自腹を余儀なくされているが、勉強熱心なメンバーが多く不満は出ていないという。

アクロスは世界遺産登録が現実味を帯びてきた二年前、組織内に「ガイド部会」「地域貢献部会（ボランティア推進）」「情報研修部会」の三部会を設けた。

「世界遺産は宗教が深く関わっていることもあり、いい加減なガイドはできない。ガイドの質を上げる必要がある」との声が上がり、各メンバーのレベルアップと知識習得を目的とした情報研修部会を立ち上げようという話が浮上。ガイド、地域貢献の両部と併せ設ける形となった。

情報研修部会で講師として登壇するのは、メンバーの元学芸員や元教員。「人が人を育てる組織」として日々、研鑽を積んでいる。

行政からのメッセージ

後継者育成に取り組むアクロスに期待

長崎県五島市には、観光客の受け入れなど、五島列島の観光を担うガイド団体が4団体ある。昨年7月に登録された世界遺産の構成資産を中心とした巡礼や神社・仏閣に詳しい団体、トレッキングや登山など自然散策を案内できる団体、インバウンド対応に強い団体など、それぞれが特色あるガイド団体であり、五島列島へ来られる観光客へのおもてなしや島内の地域活性化に一役買っている。

そのうちのひとつである「NPO法人アクロス五島」は、観光客と交流人口の増大を図る事業を手掛け、五島市の発展と豊かなまちづくりに寄与することを目的として、2009年に設立された。

島の案内人としての観光ガイドのほか、県内外でのボランティア活動、体験型プログラムを活用した修学旅行の受け入れなど、いろいろな場面で活動を行っている。

私は2017年からガイド団体の研修・育成を図る組織「五島市おもてなしガイド連絡協議会」の事務局担当となり、世界遺産を巡る着地型旅行商品である「五島列島キリシタン物語」や、夜型観光素材として新たに実施している「鬼岳星空

ナイトツアー」の企画開発やガイド育成に携わっている。

2018年度は、世界遺産登録効果により、五島市への観光入り込み客数は約2万6000人増加し、約24万人と推計している。それに伴うキリシタン関連ツアーや定期観光バスなどの催行数や参加者の増加により、ガイドの需要や役割、重要性はますます高まっている状況だが、その中でもアクロス五島はなくてはならない重要な存在となっている。

その理由のひとつは、2017年10月から五島市で夜型観光として実施している「鬼岳星空ナイトツアー」ガイドを、アクロス五島が受け持っていることである。

もともと自然に強いガイド団体であるものの、星については一からの勉強であり、みんなで時間をつくっては鬼岳へ登って星の勉強をする姿には本当に感服させられた。今では星空ガイドとして、年間約300人の観光客へ満足度の高いツアーを提供している。

もうひとつの理由としては、五島市全体として、ガイドの高齢化や後継者育成が課題となっている中で、アクロス五島は将来のガイド不足に危機感を抱き、若年者ガイドの育成を図ることが挙げられる。現に星空ガイドの中心となっているのは、20歳代のIターン者である。

五島観光で欠かせない役割を担っているアクロス五島が引き続き発展していけるよう、これからも側面から支援していきたい。

(五島市観光物産課
観光物産班係長 馬場崙初則)



鬼岳頂上から望む福江島。

現在の主力メンバーの平均年齢は六十歳代後半で、定年を迎えた年代がほとんどを占める。山口理事長によると、生活はある意味、安定している世代でもあり、収入よりも知識を増やしたいという欲求や、社会や地域に貢献したいという意欲を持っている人が多いという。

ある島の関係者が「もしアクロスがなくなってしまうたら、観光面で市はかなりのダメージを受けてしまうだろう。

それぐらいにまでアクロスは成長した」と話す通り、今やアクロスは五島市の観光になくてはならない存在のようだ。山口理事長は「五島市が生き残っていくには、観光産業が不可欠。アクロスとしては、どんどん次世代を担う若い人材を育てていく必要があるし、島としても住民全員がある意味ガイドのような役割を担えるようになっていけば」と力を込める。

アクロス五島体験ルポ 体験講座「しま山を歩こう」に参加

■トレッキング前に座学で山を勉強

島の魅力を再発見することを目的に、公益財団法人日本離島センター（東京）は二〇一六年度に「しま山100選」を選定しました。

その中に五島市にある四つの山が選ばれたことを機に二〇一九年一月、NPO法人「アクロス五島」が山の魅力をスペシャリストから学ぶイベント「無料体験講座しま山を歩こう」を同市の福江島で開催すると聞き、参加しました。

島のシンボルである「鬼岳」にも登る、と事前に聞いていました。島を訪れた際、いつも下から見上げているもの、きつかけがないとなかなか登る機会もありません。

高く険しい山ではないので、僕のような初心者でも登れるのでは、いつか登ってみたいな、と何年も前から思っていた

ので、楽しみにしていました。

イベント当日のプログラムは、午前はまず座学で山の勉強、午後からフィールドに繰り出しての山登りです。

アクロスは島内でのトレッキングガイドも手掛けていますが、地元の人にあらかじめ山の魅力を知ってもらうことも大切だと考え



「無料体験講座しま山を歩こう」は座学からスタート。

ているようです。

座学が開かれる五島市福江文化会館に行くと、やや広めの会場にも関わらず五〇人以上の参加者でぎっしり。島といえど海にばかり目が向けられがちですが「しま山に関心のある人は意外と多いんだな」という印象を受けました。

最初に登壇した講師は、地元で「五島山野草の会」を主宰する坂井豪(たけし)さん。鬼岳周辺でみられる草花のうち、比較的珍しいものを中心にプロジェクトで写真を見せながら紹介していきます。

会場からは「これ、よく見るわね」「ああ、これがそうだったの」といった声が上がリ、熱心にメモをとる姿もみられました。とりわけ、女性陣は草花への関心が高いようです。

続いている講師は、福島県在住の山岳ガイド奥田博(ひろ)さん。山に関する著作が三〇冊以上ある著名な方ですが、アクロス理事長の山口澄子さんと数年前から交遊がある縁で、はるばる福島から来られたそうです。山口さんの人脈は全国に広がりがあるようで、顔の広さに感心しました。

奥田さんは、登山ガイドをする際に心掛けていることとして「ガイドは単なる案内人ではなく、参加者の体力を押し量りながら、弱い人に合わせたペースをつくることも大切」などと説明。参加者の中には、アクロスのメ



鬼岳の登山口を元気に出発。



山道沿いの草花や会話を楽しみながらトレッキングを満喫する参加者。

ンバーを含め山岳ガイドを手掛けている人もいましたが、実践的なアドバイスに、しきりにうなずく姿も。昼食休憩を挟んで、いよいよ山登りです。

■幅広い世代が集まり鬼岳に登る

鬼岳の登山口は、福江島の玄関口・福江港から車で二〇分ほど走った場所にあります。集合場所に着くと、座学の参加者のうち、四〇人ほどが集まっていました。

話を聞いてみると、参加者のみなさんは地元の「歩こう会」や草花に関心のある人など。ご年配の方が中心ですが、二十歳代とみられる若手もいて、幅広い年代がそろっています。山裾から鬼岳を見上げると全面、芝生に覆われていて、おまんじゅうのようにふっくらと丸い形をしています。低いとはいえず山であることに違いないし、普段運動もしていないのに大丈夫かな、他の参加者に迷惑をかけないかな、という不安もありましたが、ゆっくり歩けば登頂できそうに思えました。

出発に先立ち、アクロスのメンバーから説明がありました。鬼岳は標高三二五メートルで地元では「おんだけ」と呼ばれていること、じつは活火山であること、さらにアクロスでは夜の鬼岳を舞台に星空観察ツアーを実施しているとの報告もありました。



鬼岳山頂 (315m) はもうすぐ。

そして、いよいよ出発です。気持ちよく晴れ渡ってはいましたが風が強く、やや肌寒く感じました。しかし、歩いていくうちに体も温まってきました。アクロスのメンバーは集団の中で前後に散らばって歩いていきます。参加者の中には杖を手にもっている方もいましたが、そんな方にもさりげなく目配りしているようでした。座学で、奥田さんが山登りにはいろいろな楽しみがあるという話をしていましたが、現場はまさにその通り。みなさん頂上を目指してただ黙々と歩くのではなく、足元に咲く珍しい草花に足を止め小さな歓声を上げたり、ふもとに見える集落を指さし「自分の家はああたり」と話すなど、思い思いの時間を過ごします。



鬼岳の頂上で記念撮影。



転倒しないよう慎重に下山する参加者。

たまりもないね」などと冗談を言う方もいて、集団が笑いに包まれる場面もありました。

すぐ前を歩いていたご年配の女性に「おんだけは、よく登るんですか？」と話しかけたところ「今はほとんど登らないけれど、子どものころはしょっちゅう！」と笑っていました。なんでも、子どものころは遠足といえは鬼岳ばかりで、小中高と、いやになるほど登ったそうです。

しばらく進むと、最初は足首ぐらいまでしかなかった雑草が、いつの間にか腰の高さぐらいにまでなってきました。スキのようです。そして、ほどなく頂上に着きました。

低いとはいえ、山頂にたどり着くと達成感に満たされました。参加者も、心なしかみな満足そうな表情をみせています。奥田さんやアクロスの方がペース配分に気を使われたのでしよう、僕も息を切らすことなく無事でした。

お決まりの登頂記念写真を撮影しました。僕がちょうど一眼レフカメラを持っていたので、撮影役を拝命。ハイチーズで、みなさんとてもいい笑顔の写真が撮れました。

頂上では、再びアクロスのメンバーが眼下に広がる景色をガイドします。山頂からは福江島の約三分の一が見渡せるそう、島の大きさを実感しました。

そして今度は下山です。「下りは登りの時より気をつけて」と誰かが言ったので、足元に注意しながらそろそろと進みました。

出発から下山まで、約二時間の行程でしたが、脱落者もなく楽しいトレッキングとなりました。

アクロスのメンバーのガイドは、地元だから知っているといった話だけではなく、しっかりとした勉強に裏付けられた知識を元に話をされているな、という印象を受けました。機会があれば、今度は別の山をガイドしてもらおうと思います。



竹内 章 (たけうち あきら)

1974年生まれ、富山県出身。元中日新聞社記者。2015年、長崎県新上五島町に地域おこし協力隊として移住し活動。昨年3月に任期を終え、離島在住のフリーライターとして屋号「ツムギヤ」で独立し活動中。